

イアン・マクハーグの築いた50年とその先

Ian McHarg's Foundation at 50

リチャード・ウェラー *Richard WELLER*

ペンシルバニア大学デザイン系大学院ランドスケープ学科長・教授
University of Pennsylvania School of Design, Dept. of Landscape Architecture, Chair and Professor



人生で50歳にさしかかる時、私たちはそれまでの人生で何を達成できたかを振り返り、そして将来に向けて慎重に計画を立てる必要がある。同じく、今年2016年6月1日にランドスケープアーキテクチャー財団(Landscape Architecture Foundation, 以下LAF)はその50周年を記念した祝宴を開催した。

LAFは1966年に、Ian McHargがマニフェスト(時代を代表する意見)を掲げて、Grady Clay, George Patton, Campbell Miller, Charles Hammond, and John Simondsらと共に設立した。危機的な環境問題という時代背景にLAFは設立され、ランドスケープアーキテクトはその中心として、問題解決を担ってきた。そして50年後の今年、私たちは世界的な職能となったランドスケープアーキテクトとして、どのように私たち自身生きてきたかを正直に問い直し、これからの50年に向けてどのような目標の達成を目指すのかを明確にする必要がある。このような目的を達成するために、ペンシルバニア大学ランドスケープ学科では今年の6月10日と11日に世界中からフィラデルフィアに集まった700名以上のランドスケープアーキテクトと共に「これからのランドスケープの職能」について議論する機会を設けた。

ここでその会議のハイライトをお伝えしよう。

中国のKongjian Yuは、ランドスケープアーキテクチャーは「表面的な装飾ではなく、ディープ・フォーム(深い考え方に根ざした形態)」を追求するべきであると定義した。彼は、「私たちは王様のように深く大きく考え、歩兵のように動かないといけない」と言及した。彼はまた、壮大なランドスケープのビジョンをもつと同時に、時間軸に伴って展開される工業化以前の農業社会のようなランドスケープマネジメントの技術を活かして仕事をするべきであると述べた。Alpa Nawre(インド)、Martha Fajardo(コロンビア)とMario Schjetnan(メキシコ)は「21世紀のランドスケープは、世界的都市の富裕層のためだけのものではなく、発展途上国においてより積極的に展開されるべきだ」と述べた。これはIFLA(国際ランドスケープ連盟)とそれから世界の主要な教育機関において大きな課

題となる。発展途上国で、ランドスケープが強い影響力をもつことの重要性はDavid Gouverneur(ベネズエラ)の取り組みからも垣間見ることができる。彼は、どのようにランドスケープインフラストラクチャーが南米やアフリカで増加する低所得者層居住地域において作用しうるか、彼の研究を通じた意見を述べた。Kate Orff(米国)は、ディベロッパーではなく、その場所に住む市民たちとつながりながら働く方法についてプレゼンを行った。彼女のデザイン手法は新しい生態学的なプロトタイプに基づくものであり、データ収集のリサーチ段階から施工まで、地元の住民にもオープンで教育ツールともなる新しいデザインプロセスを重視したものである。Christophe Girot(スイス)は、私たちのNature(自然)に関する考え方が時代を追って変化してきたことにふれ、「ランドスケープアーキテクトは原点に立ち返り、私たちと他の職能、例えば同じく現代のランドスケープ空間を形成する生態学者やエンジニアのアプローチとは明確に差別化を図るべきだ」と述べた。似たような論調では、Marc Treib(米国)が、「日本庭園の世界の中にそれはあるとし、私たちは常に美を創造することを究極の目標とすべきだ」と語った。

世界的な都市化を生き抜く世代からは、Kelly Shannon(米国)、Chris Marcinkoski(米国)、Henri Bava(フランス)、James Corner(米国)、Charles Waldheim(米国)など、みな都市のランドスケープに集中的に取り組んでいる人たちであるが正に、「ランドスケープアーバンイズム」というつながりのもと、世界的な都市化の圧力とそのプロセスにおいて、ランドスケープアーキテクトという職能がそれらをどのように牽引していくかが、少なくとも過去10年間における世界的なランドスケープの潮流では最も大きなものであったと言及した。Shannonは「どこに適切な建設行為をするかを検証するマクハーグ流の生態的ブランニングの時代は終わり、生態的なランドスケープ思考が都市デザインを牽引すべきだ」という考えを述べた。James Cornerは「すべての都市は庭であり、劇場であり、想像するための場所である」と述べた。Cornerにとって「都市は経済的な価値や物質的なものだけではなく、私たちが文化的な想像力を働かせる場所であることが最も重要であ

る」と締めくくった。Chris Marcinkoski は、「私たちの職能は過去 50 年間、自然のシステムについてとらわれすぎた」と述べ、「これから 50 年間は開発の経済や政治的なダイナミクスも理解した上で、これからの都市の形態に影響を与えるような職能であるべきだ」と述べた。最後に、歴史的な Frederick Law Olmsted や現在のデザイナーたちの事例を参照しながら、Charles Waldheim は「ランドスケープアーキテクトこそがこれからの時代のアーバニストである」と締めくくった。

しかし、私はここで「都市」の定義が間違っただけで認識されているように感じた。この議論では都市がより広大なランドスケープよりも、大きな存在であるような描かれ方をしていると思ったのである。私たちはグローバルシステムとしての 21 世紀の都市を理解する必要がある。都市はどこからか始まり終わるものでもはやない。都市とそのインフラは世界的な生態システムに織り込まれたものである。そのような考え方から言い換えると、都市は新しい世界的な自然であるといえるのではないだろうか。それゆえに、Waldheim が述べたように、もしランドスケープアーキテクトが新しい時代のアーバニストなのであれば、私たちの職能もウォーターフロントや広場やストリートなど一般的な都市デザインの実践で満足するのではなく、地球の保全に向けて世界中の資源の流れなどにも積極的に取り組むべきなのではないだろうか。

これからのランドスケープの職能に関しては、オランダから参加した Dirk Sijmons によって最も明確に表現された。彼は石油社会から自然エネルギー社会への転換に関する研究を続けているし、カナダの Nina-Marie Lister は気候変動時代の大きいスケールでの生物多様性に配慮したランドスケープのコネクティビティ（つながり）について研究を続けている。こうした考え方は、私に直近のみらいに何をすべきかアイデアを与えてくれる。国連の生物多様性条約（CBD 日本をはじめ 195 カ国が参加）は 2020 年までに、地球の陸地上で生態的に重要な 17% のエリアを保護区域として保全することを目的としている。私たちは現在 15.4% まで達成している。そう、私たちは法律にも合意のもと、世界の他の地域から新たな 1.6% を自然保護区域に指定しなければならない。この 1.6% というのは第一印象では非常に小さな数字に聞こえるかもしれないが、地球上の 1.6% の陸地とは、面積に換算して 2,327,800 km²、これはセントラルパーク 695,835 個分にあたる。別の言い方では、セントラルパーク地球 7 周分の量なのである。一番重要なことは、私たちは単なる陸地の量的な保全を行うだけではない（偉大なバイオロジスト EO Wilson



LAF シンポジウムの集合写真（写真：You Wu）

は地球上の 50% は生物多様性が与えられるべきだと述べている)。分断された小さな生物棲息域をつなげて、新しいランドスケープマトリックスをつくる必要がある。ここで重要なのは、17% の保護された陸地が一箇所にあることではない。17% は世界に 867 あるエコ・リージョンのそれぞれを代表するものの集合体でなければならない。

ところで、ペンシルバニア大学では、世界がこのような目標にどのように取り組んでいるか検証している。この観点からみると、日本の山間部では 19.1% が保全され、CBD ターゲットの 17% を超えているものの、非常に良い状態を保っている。しかし、これを日本に存在する 9 つのエコ・リージョンに分けてエリア別に検証すると、9 つの中 5 つのエリアに関しては、17% を超える保全を達成できている。残りの 4 つ CBD 標準にみたないエリアは太平洋山間落葉広葉樹林帯、太平洋常緑広葉樹林帯、北海道常緑針葉樹林帯と日本海常緑広葉樹林帯である。日本のランドスケープアーキテクトは、こうしたランドスケープに関して研究し、ただ保全をするだけでなく、これらの地域内でどのように生物棲息域を再生するか、またこれらをネットワーク化させて他の土地利用とともに機能しながら、どのように新しいランドスケープシステムを構築可能か、検証すべきではないだろうか。

とはいえ、日本は他の国に比べて非常によいレベルで生物多様性のための土地が保全されている。ここで重要なのは、日本は島国では決してないということである。日本のこれからは世界の将来の方向性に影響を強く受けると同時に、私たちが現在、都市の中で大きなランドスケープのシステムに取り組むことで世界の将来像も変わる。これこそが「これからのランドスケープの仕事」であると、私は考える。

（翻訳・構成：福岡孝則）